

食料危機下のトウモロコシ貿易の特徴と国際関係

—新興諸国・EU・スペイン語圏諸国等の影響をめぐって—

東京農業大学国際食料情報学部 小島 泰友

1. はじめに

本稿では、2007～08年の食料価格高騰期におけるトウモロコシの貿易動向を分析し、当時の貿易の特徴と国家間の貿易関係の変化を明らかにする。特に、各地域や各国におけるトウモロコシの生産・輸出・輸入の統計データから、それぞれの国際需給への相対的な影響度を数量分析する。さらに、食料危機のなかで、諸国家の貿易関係がどのようなものであったのか、その変化を見ていく。

2007～08年の食料危機の原因として、新興国の台頭による石油消費の増加、それに伴う原油価格高騰と米国・EUのバイオ燃料政策[1]、地球温暖化による気象変動と穀物生産の不安化、価格高騰期における穀物輸出国の輸出規制、金融投機などが挙げられる。このほか、ASEAN諸国、NIEs（新興工業諸国）に加え、BRICs（新興経済4カ国）、NEXT11（新興経済発展国家群）等の経済発展・所得増大に伴う食料消費水準の高度化による穀物の需要増加が挙げられる[2]。

本稿では、これらの国家群に加え、EU27カ国やスペイン語圏諸国等（ポルトガルを含む）の影響に着目しながら、分析を進めていく。なお、NIEs（新興工業諸国）は以下のようにAとBのグループに分ける場合がある。NEXT11とは以下の国々である。
 NIEs-A: 韓国、香港、シンガポール、ブラジル、ギリシャ、旧ユーゴスラビア諸国（6ヶ国）（台湾は含まれていない）
 NIEs-B: メキシコ、スペイン、ポルトガル
 NEXT11: イラン、インドネシア、エジプト、韓国、トルコ、ナイジェリア、パキスタン、バングラディシュ、フィリピン、ベトナム、メキシコ

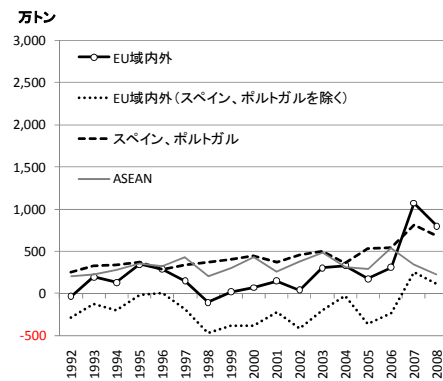


図1 EUとASEANのトウモロコシの純輸入量

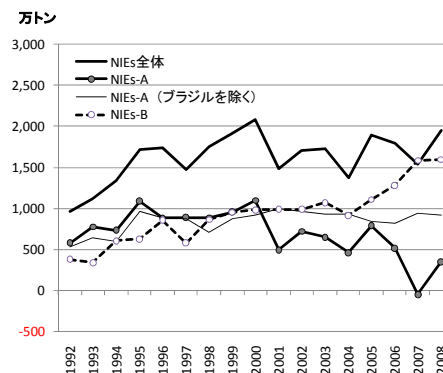


図2 NIEsのトウモロコシの純輸入量

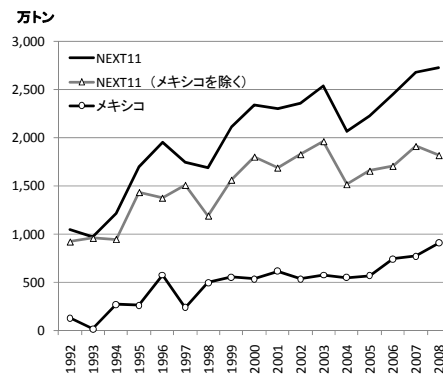


図3 NEXT11のトウモロコシの純輸入量

註) 図1～図3までFAOSTATをもとに筆者作成。

表1 各グループ国の輸入増加寄与率

グループ国	2007年		2008年		輸入シェアの増加分((b)-(a))
	2007年の寄与率	過去7年の平均輸入シェア(a)	2008年の寄与率	過去7年の平均輸入シェア(b)	
EU27ヶ国(域内外輸入)	52.5%	15.2%	49.8%	16.5%	1.4%
EU(スペイン、ポルトガルを除く)	34.5%	9.7%	36.2%	10.7%	1.0%
スペイン・ポルトガル	18.0%	5.5%	13.6%	5.8%	0.4%
ASEAN(10ヶ国)	-1.1%	5.1%	-5.7%	4.8%	-0.3%
NIEs全体	29.8%	24.5%	37.4%	24.5%	0.0%
NIEs-A(11ヶ国)	2.1%	12.2%	2.4%	11.6%	-0.5%
NIEs-B(3ヶ国)	27.8%	12.3%	35.0%	12.8%	0.5%
NEXT11	18.4%	27.0%	26.3%	26.5%	-0.5%
NEXT11(10ヶ国、メキシコを除く)	8.6%	20.1%	5.0%	19.5%	-0.6%
メキシコ	9.8%	6.9%	21.4%	7.0%	0.1%
南米諸国(4ヶ国) (コロンビア・チリ・ペルー・ベネズエラ)	10.6%	5.8%	15.3%	5.9%	0.1%
BRICs(4ヶ国)	-2.3%	7.1%	-4.3%	6.6%	-0.6%
ブラジル	1.6%	0.9%	0.7%	0.8%	-0.1%

註) FAOSTAT をもとに筆者作成。

2. EU と ASEAN の影響

2007年において、世界全体のトウモロコシ生産量は、その過去7年間の平均比で約20%増加した。しかし、EUでは生産量が例年より約1,000万トン以上(同平均比-18%)減少した。この減産で、EUでは輸入が活発となった(純輸入量について、図1参照)。この年、世界全体のトウモロコシ輸入量は同平均比で24%伸びたが、それに対するEUの寄与率は約53%であり、世界全体の輸入増加の約半分はEUによるものであった(表1参照)。

その後、2008年でも、世界全体のトウモロコシ生産量は、同平均比で約20%増加した。EUでも同平均比で9%生産量が伸びた。この年、世界全体のトウモロコシ輸入量は同平均比で15%伸びたが、それへのEUの寄与率は約50%であり、EUの生産量が伸びたこの年でも、世界全体の輸入増加の約半分はEUによるものであった。EUの輸入シェアは世界全体の15%強程度であるが、世界全体の輸入増加に対するEUの寄与率は非常に高い。

補足として、上記の寄与率は、EUの域内と域外貿易を合わせたものであるため、EUを1つの国と見なし、域内貿易をカウントせず域外からの輸入量のみで寄与率を求めると、両年ともに44%である。依然、EUの寄与率が非常に高いことが分かる。90年代後半以降、EU域外からの輸入比率は20~30%であったが、両年では約45%まで上昇した。

一方、ASEANの寄与率は、2007年-1.1%、2008年-5.7%であり、輸入増加に寄与していなかった。

3. NIEs と NEXT11 の影響

図2から分かるように、NIEs-Aでは2007-08年において純輸入量が減少している。これは、ブラジルのトウモロコシ輸出が伸びたためである。ブラジルを除くNIEs-Aの推移をみると、純輸入量はほぼ横ばいであり、国際需給に大きな影響を与えていない。しかし、メキシコ、スペイン、ポルトガルといったNIEs-Bの純輸入量は、2005年から1,100万トンを超えており、NIEsの中でもスペイン語圏諸国等の影響が他のNIEs諸国より大きかったといえる。表1を見ると、寄与率は圧倒的にNIEs-Bの方が高い。

NEXT11に関しては、図3を見る限り、純輸入量

は90年代から2008年まで伸びているが、メキシコを除くと、2000年代ではほぼ横ばいである。しかしメキシコの場合、2005年まで500万トン台であった純輸入量が、それ以降700万トンを超える水準に達している。表1を見ると、メキシコ1カ国の寄与率が他の10カ国の合計を上回っている。

このように当時の動向を見ていくと、2007-08年の食料価格高騰期におけるトウモロコシの輸入需要増加の要因を考える際には、ASEAN、NIEs、NEXT11といった新興諸国というより、新興諸国の中のメキシコ・スペイン・ポルトガルの動向に着目すべきであるといえる。新興国として分類されていないが着目すべき諸国は、コロンビア・チリ・ペルー・ベネズエラといった南米諸国である。

4. 結語

本稿が示すように、2007-08年の食料危機におけるトウモロコシの輸入需要の増加に関して、EU諸国の影響が大きかったこと、新興国の中でもスペイン語圏諸国等の影響が強かったことを認識しておくことが重要である。さもないければ、ASEAN諸国、NIEs、NEXT11といった新興諸国が、経済発展・所得増大に伴う食料消費水準の高度化によって、食料危機下で一様にトウモロコシの輸入需要を増加させたという誤った印象を与えかねない。

参考文献

- [1] 坪田邦夫「新興国等の食料需給動向と日本農業の針路」『農業経済研究』第81巻、第2号、2009、pp.60-75.
- [2] 矢口芳生「2E2F危機下の日本農業の進路」『農業経済研究』第81巻、第2号、2009、pp.76-92.